

原 著

介護員の在宅介護に対する反応と問題

清水 裕 子 *

Response of Nursing Care Workers to Home Nursing and Related Problems

Hiroko SHIMIZU *

Abstract

Nursing care workers make up the key manpower supporting home nursing in Japan's silver community. The objective of this study is to review the psychological problems faced by nursing care workers in their nursing practice. A survey was conducted on nursing care workers from the Kanto region who attended the "Human Relationships and Communication" training course. Questionnaires were distributed to 65 nursing care workers, of which valid replies were received for 82% (53 persons). These 53 responders consisted of 5 males and 48 females with an age range of 20 to 69. Questions included age, sex, number of years of nursing experience, impression and image of home nursing, problems faced, what the participants hoped to achieve from the training, etc. The questionnaire results were analyzed by categorizing the subjects into two groups (A and B) with 6 months nursing experience as the cutoff point, and conducting semantic analysis using statistical procedures and SD method. Subjects were asked to describe their impression of home nursing as either "fun" or "troubling," and their image of home nursing using any three words they liked. No notable differences were found for "impression" between the two groups; however, significant disparities were found for "image." The group with shorter experience had a more negative image. The results suggest that group A workers may be intrinsically suffering heavy physical labor and anxiety while group B workers may be experiencing problems stemming from relationships with colleagues.

キーワード： 介護員(Nursing care workers), 在宅介護(home nursing), 意味論(semantics), ストレス(stress),
(Key words) イメージ(image)

はじめに

我が国は世界に例のない急速な高齢社会を迎えており、在宅療養する高齢者を含む障害者への福祉サービスは自治体の重要な課題となっている。

我が国の高齢者の増加は2000年には虚弱・痴呆・寝たきり高齢者全体で280万人であったが、2010年には390万人、2025年には530万人(虚弱

260万人、痴呆40万人、寝たきり230万人)と厚生労働省は推計している(厚生省, 1998)。このように高齢化が深刻化する中、自立して生活できない高齢者に対するサービスは施設と在宅で提供されている。在宅における問題の一つは介護力である。この介護力と逼迫した医療保険制度の改善に対する施策として、2000年4月から公的介護保険制度は始まった。これは家族による介護を公的サービスで補おうとする政策である。介護保険による介護サービスの提供方法は、自宅に訪問して介護を行

* 聖母女子短期大学 (Seibo Junior College of Nursing)
2003年6月23日受稿/2003年8月6日受理

う方法と施設に入所する方法がある。在宅における専門的なマンパワーは、医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、介護員（通称、ホームヘルパー）、理学療法士、作業療法士などであり、生活援助の面では主として看護師や介護員がサービスを提供している。歴史的に見ると、介護員制度は老人福祉法による「家庭奉仕員派遣事業」（1963）から始まり、「老人家庭奉仕員派遣事業運営要綱」の改正（1989）によって基本的な枠組みが作られた。同年に保健福祉10カ年計画（ゴールドプラン）で介護員などの数値目標が設定され、1999年までの新ゴールドプランでは17万8500人、2004年までのゴールドプラン21では35万人、2010年度には58万人で、この年に在宅80%、施設100%の充足率を目指している（宮武，2001）。

介護員の就業は公的機関から民間の小規模な派遣事業所、施設など様々である。また、業務の内容は療養者の身体介護を中心とするもの、身体介護と家事援助を組み合わせで行う複合型、家事援助を中心とするものの3つのパターン^{（注1）}がある。国は身体介護を行う介護員が多く養成されることを期待しているが、介護員3級の家事援助が資格取得の面からもより多く養成されている現状にある。

在宅介護における主たる介護力は家族の構成員が介護者となる在宅介護者と介護員である。両者における介護力の負担度の違いについて調査した緒方・當瀬・山田（1997）は、在宅介護者270名と介護員194名にcoat of care index（Kosberg & Cairl, 1986；溝口，1995）を実施して介護負担感を比較検討し、負担感軽減の提言を行う研究を行った。coat of care indexは、介護者の負担感を半定量的に評価する指標であり、介護作業が介護者に及ぼす負担を社会的制約、心身の健康、意欲、不愉快、経済的負担の5つの側面から調査を行う調査票である。これを用いて調査した結果、在宅介護者は家族構成員を介護することを当然の務めとして受け止めながらも、介護に対する時間的負担、介護者の心身

の状況、被介護者の日頃の言動等が被介護者の人間性や人格の尊重、思いやりに悪影響を与え、積極的な意欲に欠けるものがあることを指摘している。一方、介護員の40%が被介護者の健康面を懸念しているものの、他の要因については不安を感じてなかったとし、心身の健康面と同時に介護に関わる条件整備により質の高い介護を提供する人的資源となりうる、と結論づけている。しかし、緒方ら（1997）では、介護員と在宅介護者との相違のみを扱っており、介護という体験に起因する心理的問題については検討していない。

介護員が体験する介護場面におけるメンタルヘルスの問題は、福永・児玉・黒岩（2000）が介護員208人に行った介護ストレス調査がある。そこでは、介護サービスの利用者との関係、仕事の内容、利用者の家族との関係、職場・同僚との関係、他職種との関係その他について調査された。その結果、15～20%の介護者が金品の紛失で疑われたり、もう来て欲しくないと言われたりとする経験を持っている。さらに、介護時間の不足や介護内容への不満、本来業務外の仕事の依頼、待遇への不満感、自分の健康不安などから来るストレスも見られた。特に利用者家族や、同僚、他職種などとの人間関係のストレスは2級介護者より1級介護者に多いことが報告されている。これらのことから介護員は社会的地位や職務内容に対する問題と介護場面での人間関係でストレスを多く抱えていることが分かる。しかし、福永ら（2000）の調査は介護場面の現象記述的であり、介護員の心理的な問題について検討されていない。その他、畑・松井・栄・岡田・白澤（2001）のような研究も同様な結果を報告している。以上のように、これまでの研究は介護員が質の高い介護を提供できるマンパワーでありながら制度としての歴史が浅いことなども影響して、介護員の関係性によるストレスや心理的な問題について具体的に検討がされていない。

従って介護員の体験に起因する心理的な問題について検討するために、コミュニケーション言語

についての意味論的分析を行う目的で、対人関係性に学習動機を持つと考えられる「人間関係とコミュニケーション」研修講座を自主的に受講した介護員を対象として調査を行った。

方 法

1. 対象者

対象者は首都圏の県庁所在地にある介護労働安定センターにおいて主催された介護職対象の研修会講座「人間関係とコミュニケーション」を自主的に受講し、調査に同意した関東地区の介護員である。得られた調査票65名の内有効回答は53名(83%)で、これを分析対象とした。その内訳は男性5名、女性48名、年齢は20代から60代であり、年齢構成は図に示したとおりであった(Fig. 1)。

2. 調査期間

調査期間は1999年12月から2000年12月であった。

3. 調査の手続きと調査票の構成(付票1)

調査は「人間関係とコミュニケーション」の講義の前に口頭にて調査の趣旨を説明し、同意を得た上で記入を求めた。調査項目は年齢、性別、介護経

験の期間、在宅介護に関する印象とイメージ、現在の悩み、「人間関係とコミュニケーション」研修講座への期待であった。「在宅介護の印象」は「楽しい」「時々楽しい」「どちらともいえない」「時々苦しい」「苦しい」の5段階の評定尺度である。また刺激語「在宅介護」から連想される言葉を3つ記述することを求めた。「印象」と「イメージ」という働きかけは、2側面の言語的刺激によって対象に関する知覚を想起させ、複数の認知的的水準を明らかにする評価の方法として試みた。この他、自由記述で現在の悩みと講義への期待について回答を求めた。

結 果

結果の分析:今回用いた「在宅介護」についての評価は、意味微分法(以下、SD法とする)によって行われた。すなわち、コミュニケーションの中にある「在宅介護」を刺激とし、その認識に伴って表象する観念をSD法によって直接的に把握しようとするものである。本研究では印象とイメージの2側面から質問を行った。「印象」は「在宅介護」に対する感覚的知覚であり、主観的で感情に左右される判断である。一方、イメージは対象が眼前になく再生された直感的な心像であり、観念 idea と呼ば

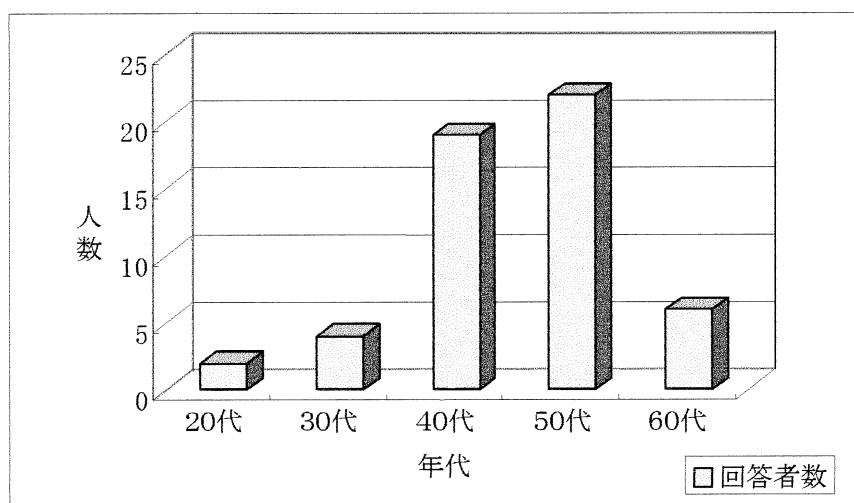


Fig. 1 対象の年齢構成

付票 1

質 問 紙

下記の質問をよんで、回答してください。回答については答えられる範囲で結構です。

1. 次の質問には該当する項目に○を記してください。

- 1) 年齢 1: 20代 2: 30代 3: 40代 4: 50代 5: 60代 6: 70代
- 2) 介護の経験年数 0: なし 1: 1ヶ月未満 2: 3ヶ月未満 3: 6ヶ月未満 4: 1年未満
 5: 3年未満 6: 5年未満 7: それ以上
- 3) 「在宅介護」印象 1: 楽しい 2: 時々楽しい 3: どちらともいえない 4: 時々苦しい 5: 苦しい

2. 「在宅介護」についてイメージする言葉を3個、記述してください。

() () ()

3. 現在の悩みがあれば自由に記述してください。

4. 「人間関係とコミュニケーション」の講義に期待することがあれば記述してください。

以上

れ、具体的な知覚像とは区別しにくいものである。「印象」と「イメージ」の2つを言語刺激としたことは、複数の認知的水準を意味論的に検討するというねらいからこれを用いた。印象の回答が形容詞対による楽しいー苦しいという一元的な判断で回答を求めたことに対して、イメージは自由連想によるもので、回答者の体験にも基づく固有の回答があるものと考えた。そのような意味で、印象はA、B群を比較するためには有効であるが、イメージは群間の比較と言うより、感情的な側面の多様性を比較検討することができると考えられた。

分析の方法は、対象を経験年数によって分割し、経験年数6ヶ月未満をA群(23名)、6ヶ月以上をB群(30名)としカテゴリー化した。6ヶ月を分割点としたのは、全国労働基準関係団体連合会によ

るモデル就業規則によれば、その人の勤務態度や敵性、能力を観察する上で雇用者が1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月などを試用期間としていることが一般的である。このことから職業適応の時期の上限を6ヶ月が目途であると考え、分割点とした。在宅介護の印象については5段階の評定結果を経験年数による群を独立変数に、印象の程度を従属変数にして、A・Bの2群間で平均の差の検定を行い有意性の検討を行った。在宅介護のイメージについての分析は、記述された言葉がA・B群の2群間で回答の信頼性係数を求め、それぞれの群において言葉を「肯定的」「中性」「否定的」の3つにカテゴリーに分類した。3つのカテゴリー分類は回答された言葉を、肯定的と思われるものと否定的と思われるものとにそれぞれ分類し、いずれにも属さない

ものを中性と分類した。分類にあたっては在宅介護の研究者と在宅介護を研究している訪問看護師2名とが、言葉をカードに置き換えて個別に分類する作業を行った。3名の分類した結果を集計し、3名の分類の傾向とカテゴリーの関係について、スピアマンの相関係数検定を行った結果、3名の分類結果には有意差がなかった($p>.05$)。従って分類は信頼性の高いものと考えられた。得られた結果を基に、経験年数を独立変数としイメージの程度を従属変数として、A・B、2群間における有意性の検定を行った。自由に記述された「在宅介護における悩み」については、先行研究による悩みの項目(米村, 1996; 福永・児玉・黒岩, 2000; 他畑・松井・栄・岡田・白澤, 2001)を参考に項目ごとにカテゴリー化して内容分析を行い、2群間における特徴を見いだした。「講義に対する期待」の記述からは悩みを補足する内容を抽出して検討した。

印象についての結果は次の通りであった。在宅介護についての印象は「楽しい」4名(17.4%)、「時々楽しい」9名(39.1%)、「どちらでもない」7名(30.4%)、「時々苦しい」3名(13.0%)、「苦しい」(0.0%)という結果であった。この結果についてマン・ホイットニー検定を行ったところ、A・B群間

に有意差は見られなかった($p>.05$)。すなわちB群において「時々苦しい」と回答した人が30%いたことは特徴的であるが、経験年数の違いによる在宅介護の印象形成には差がないことが分かった。

次に、在宅介護のイメージについての結果は次の通りであった。全員が1つ以上の言葉を回答しており、平均の回答個数はA群で2.65個、B群で2.67個であり、2群間では回答した言葉の数に差は認められなかった($P>0.5$)。回答された言葉は次のように分類された。A群での肯定的イメージの言葉群(「優しさ」「安心」「精神的な強さ」「きずな」等、10個)の占める割合は16%、中性イメージ(「家族」「体力」「娘」「嫁」等、25個)で39%、否定的イメージ(「犠牲」「重労働」「心身の疲れ」「疲労感」「苦労」等、29個)で45%であった。一方、B群の肯定的イメージ(「思いやり」「ゆとり」「明るさ」「安心」「ありがとう」等、29個)で38%、中性イメージ(「体力」「高齢者」「知識」「心理的」等、18個)で23%、否定的イメージ(「不衛生」「暗い」「妻の大変さ」「閉鎖的」「束縛」等、29個)で38%であった。A群、B群ともに否定的イメージの言葉の割合が最も多かったが、介護経験の長いB群は肯定的、否定的イメージに明確に回答が分かれている傾向に

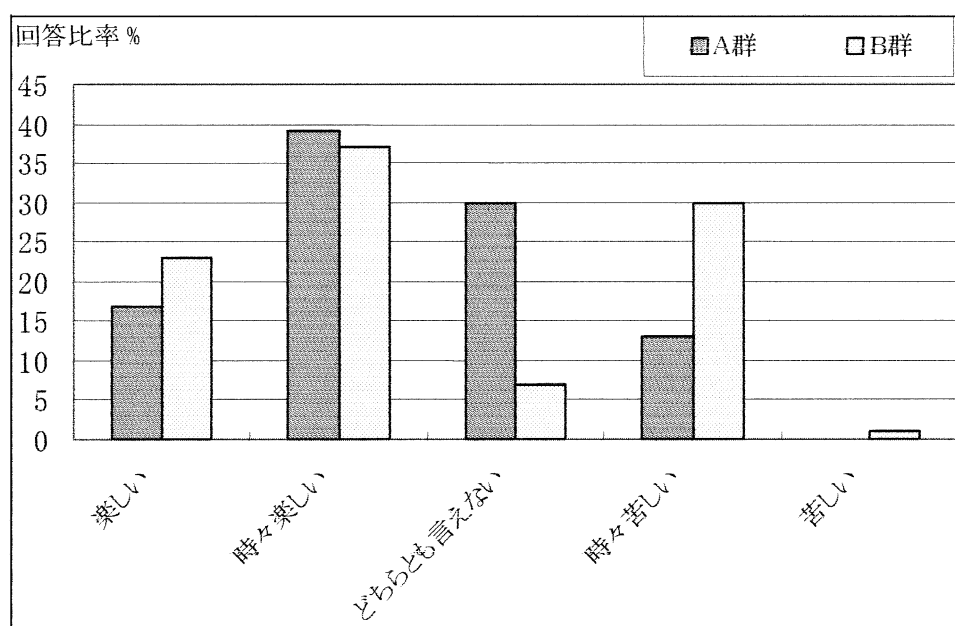


Fig. 2 在宅介護の「印象」

あった (Fig. 3)。さらに、経験年数のA・B群を独立変数とし、カテゴリー化された「肯定的イメージ」「中性イメージ」「否定的イメージ」の程度を従属変数としてマン・ホイットニー検定を行って検討した。その結果、2群間に有意差がみられた ($p<.05$)。すなわち、介護経験年数の少ない方がより否定的なイメージを持ちやすいことが考えられる。

また、「悩み」についての記述回答では、A群では15名 (65%) で回答があり、その内訳は、「介護知識不足」が5名、「ミーティング等業務の調整」2名、「体力への不安」、「時間不足による効力感の乏しさ」、「適性不安」、「個人的な悩み」各1名、その他4名であった。B群では20名 (67%) の回答があり、その内訳は「コミュニケーション問題 (対象は問題行動のある痴呆老人、引きこもり傾向・言語障害のある患者、訴えの多い患者等を特定している)」9名、「同僚との人間関係」4名、「過剰業務の改善」2名、「個人的悩み」3名、「利用者と家族との板挟み」、「施設介護との違い」各1名であった。

講義への期待の記述からみえた悩みの内容を補足する記述は以下の通りであった。A群は明確にコミュニケーションスキルを学習したいと記

述したものは、言語障害者や痴呆高齢者、問題のある利用者などとのコミュニケーションの取り方など、介護対象者に向けた具体的かかわりのスキル習得を意識した内容が多かった。自己分析、心構えなど、自己理解を前提とした対象者との相互コミュニケーションについてはあまり意識されていない傾向にあった。それに対して、B群は1対1の関係の中でのコミュニケーション、さらに受け流す方法、若い障害者とかかわり方、特に相手のニーズを適切に知覚できる方法を求めている回答が複数みられた。以上の結果から、介護経験年の浅いA群では対象理解のための一般的知識の蓄積やかかわり手法の習得に学習動機があるのに対して、経験の深いB群では日頃の悩みから派生する現実的なコミュニケーションの問題解決の方向性を得ようとする動機が優先しているといえる。

考 察

1. 印象とイメージの反応の経験年数による差

経験年数の短いA群は66%が「在宅介護」に肯定的印象を持っており、13%が否定的印象を示していた。一方、経験年数の長いB群では59%が肯定

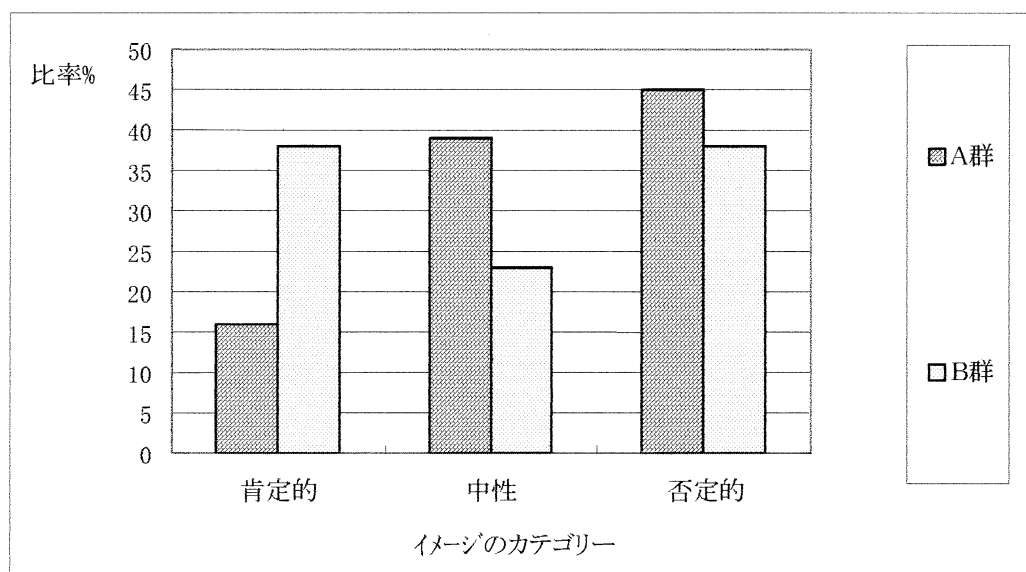


Fig. 3 「在宅介護」のイメージ

的印象を示し、否定的印象を示す者は33%で、前者に比して否定的印象を示す割合が高かった。これらのことから、介護者は介護経験を積むにつれて、在宅介護の肯定的側面のみならず、その否定的側面も知覚するようになることが示唆される。

イメージ項目の結果からは、印象項目とは異なった結果が見られた。A群では肯定的回答が16%であるのに対して否定的回答が45%と、印象領域で得られた回答パターンとは逆の結果が得られている。楽しい、苦しいの一元的な印象と自由連想によるイメージの回答が異なった結果であった理由は、楽しい、苦しいという一元的で単純には帰結できない介護員の多様な思考内容がイメージの刺激によって想起されたものと考ええる。そのような意味で、イメージは在宅介護に対する介護員の知覚を客観的に評価した可能性が高い。

また、経験の長い群は肯定的、否定的なイメージが共に38%と二分されていることから、印象とほぼ同様の結果となっている。このことは介護経験の浅い人は、在宅介護について「重労働」「心身の疲れ」「苦労」「犠牲」など、仕事としてのみならず、家族の介護をとらえて共感する態度から得られたイメージが含まれている可能性も考えられる。なれない介護の仕事に疲労感や将来への不安を感じている可能性もある。この結果から、印象とイメージは同じ内包的意味のカテゴリーであっても連想的意味のイメージには情緒的意味の印象では表出されなかった認識を把握することができた。すなわち単に「楽しいー苦しい」の印象を求めても、それは一面的であり、連想を重ねることによって、複数の意味を把握することができる。しかもデータから読み取られるものは、連想的意味は情緒的意味ではなくみ取れない水準、「苦しい」の状態像や具体的内容を表出していると考えられる。また、悩み記述の中にみられる内容には、知識不足をあげていることから、就業間もない時期には想定される悩みであり、介護員の研修の長さや内容を考えれば、就業後の研修などの充実が必要である。

介護経験の長い群の印象からは肯定的な面が強調されたが、イメージからは肯定的な面に匹敵する否定的な思考を投影させている。その否定的な面は、対人関係やコミュニケーションという学習動機の根拠となっており、介護員の抱える問題と相応している。同僚との人間関係も含めればB群の約半数がこの問題を感じていると言える。

2. 介護員の自己役割感

介護員によって提供される介護は、「身体介護に関すること」「家事に関すること」「相談、助言に関すること」の中で被介護者の実態に即して必要と認められるものとされている。訪問介護を受けている高齢者に対する調査(米村, 1996)によれば、介護員による介助の内容は重介護層や虚弱層では入浴介助やその他の介護、高齢者のみの世帯では家事援助が中心となっている。精神面での介助も重要で、高齢者の心身および日常生活は介護員によって支えられているとしている。それは高齢者の生活の不安が根底にあり、特に健康や家族、家事、家計、墓や仏壇・神棚・相続などの現在と将来についての不安を打ち明ける身近な存在として、介護員が選ばれている可能性がある。このことは、介護員の自信や自尊感情を高める期待もある。介護員は生活援助の傍ら、これらの相談に当たり、かつ同僚や同行する看護師との関係を良好に維持しようと葛藤している様子がうかがわれる。

このように介護員は多忙な業務の傍ら高齢者の相談に応じている。この現状からは、対象との関係性に対する悩みとなっているものの、自己役割感への肯定的な面も期待できる。介護職のバーンアウトと職場環境について調査を行った畑ら(2001)は、介護員のバーンアウトの抑制因子である達成感を高めるためには、専門性に対する自信やプライドを持つことが必要であると報告している。在宅高齢者の身近な相談相手になる介護員の役割は、介護員自身が達成感をえる自己役割として重要な要素でもある。介護員の対人関係の調整や職場環

境を整えて自己役割が発揮できるよう雇用者や同行する看護師などは援助する必要がある。一方で、在宅高齢者の孤立感を取り除く社会支援の方法も検討すべきである。高齢者の自立支援を促す目的で江角ら（2002）は、テレビ電話を利用した高齢者同士のネットワーク形成を試みている。これらの支援システムの開発は、一部で試験的に行われているのみであるが、介護員に対する相談相手としての過剰な依存を解決する手だてとなる可能性があり、公的なシステムの開発が待たれる。

3. コミュニケーションの問題

今回の調査対象が、対人関係やコミュニケーションに対しての学習動機をもつ対象であっただけにB群の対人関係の悩みという回答は妥当なものと考えられる。しかし「同僚との関係」の悩みが、対人関係スキルを向上させたい動機とするには、解決方法としては妥当とは言えない。むしろ労務管理上の問題として、就業環境の調査や相談のシステムが必要ではないかと考えられる。福永ら（2000）によれば、介護員は介護員同士の関係だけではなく、他職種との関係においてもストレスを感じており、中でも同行する機会の多い看護師との間で、最もストレスを感じているとの結果が示されている。しかし介護体制から考えた場合、看護師－介護員関係は、業務上の重要な協働関係にある。竹内ら（2000）は看護師と介護員の協働体制は介護員単独体制に比べて、医療処置、在宅ターミナルケア、24時間訪問看護などの可能性が広がり幅広い対象が利用できると報告している。このことから協働体制の意義は大きく、今後推進されていくとの期待を述べている。

看護師に対する在宅看護教育は平成9年に開始されたばかり（厚生省、1996）で、現在訪問看護師として就業している看護師の殆どは、病院などの施設看護を中心として経験を積んできた者である。従って看護師にとっても新たな適応が求められている現状である。在宅医療の現場では多くの保健・

福祉・看護・介護職との協働的な関係を築かなければならず、介護員との関係も意図的に関係づける必要がある。今後は、介護指導、介護のマネージメント、介護職の調整などにも看護師の役割が求められており（正野ら、1999）、加えて介護員との関係にも関心を高めなければならない。

今回のコミュニケーションスキルの向上を求めている介護員が対人葛藤を感じている対象は、問題行動のある痴呆老人、引きこもり傾向・言語障害のある患者、訴えの多い患者等看護職が対処困難を感じる患者でもあった。ヘルパーが看護師と同じ重症度の患者を介護している現状を考慮して、今後の研修の質や内容の工夫が必要であると考えられる。

4. ヘルパーの心身の問題

体力不安の悩みは、過剰な業務が介護員の体力に影響している可能性もある。米山（1996b）は介護員の内40%が健康に不安を感じていると回答している結果を示している。これは対象の介護の質に影響を及ぼすという指摘もある（緒方ら、1997）ことから、健康管理上の実態把握も必要である。

業務に関する悩みは就業6ヶ月以内の群が時間不足を悩みとしてあげている。経験の短い時期に短時間での介護には充足感が味わえないという悩みは、対象との関係作りが十分できるような介護時間が確保されることが望ましい。しかし、介護保険制度の特徴から、サービス利用者の一部自己負担を考えると、介護時間と介護職の効力感との関係は解決困難な問題であるとも言える。一方、6ヶ月以上の群では、「常にワーカー不足」「忙しすぎて」等過剰な業務内容に疲労し、対象への介護を充分できない事への苛立ちが伺われる。これは経験の長いヘルパーは過剰な業務に対処しているが、介護の質を向上させたい欲求があることを意味しているともいえる。

滝波ら（2000）は、ヘルパー110番の調査結果を報告しているが、報告された主な悩みである業務

上の知識や技術に関する悩みは、今回調査では6ヶ月以内の介護員に多かった。これは研修などによって解決可能ではないかと考えられる。しかし経験を積んだ介護員の在宅介護に対する印象が悪化していく傾向は、困難な対象への対人関係やコミュニケーション能力であり、研修の機会を設定して支援していく必要がある。

結 論

1. 介護員の「在宅介護」についての反応は、印象ではA群よりB群の方が否定的な傾向にあったが、イメージの測定では、A群の方が否定的な傾向にあった。A群は介護の仕事に慣れない時期であり、重労働感や不安が高い可能性がある。派遣する側の心理的な面への支援や研修などの機会を効果的に活用する必要がある。
2. B群の否定的な回答は、対象や同僚などとの関係において、深刻な対人関係の問題を明確に持っていることが原因と考えられる。福永らの調査では介護員との関係だけではなく、他職種との関係においてもストレスを感じていると報告している。
3. 介護員は多忙な業務の傍ら高齢者の相談相手として重要な位置づけをもっている。このことは介護員の達成感が得られる要因である一方、家族の介護員への過剰な依存を高めるリスクも考えられる。社会的孤立感をもつ高齢者への相談システムの開発が望まれる。在宅高齢者の相談機能についての援助方法は今後の課題とする必要がある。
4. 意味論的評価はコミュニケーションに内包する意味を複数の面から把握することができる。

おわりに

急速な高齢化の中で、年々多くの介護員を養成しているが、介護員は壮年層も多く健康問題を指

摘する研究も見られる。また孤立しがちな在宅高齢者の身近な存在として心の支えとなっている現状があった。後追いがちな労務管理や介護の質的向上に関する研究は今後の課題である。

(注1) 1 介護員の養成には1 級から3 級までの課程がある。1 級課程は基幹的な介護員養成課程である。2 級課程は主に寝たきり老人などの身体介護業務に当たる介護員養成であり、3 級課程は主に家事援助の業務に当たる介護員養成課程である。身体介護とは身体の介護、排泄や衣類着脱、入浴の世話、身体の清拭、洗髪、通院等の介助であり、介護報酬は4,020円である。家事援助は調理、衣類の洗濯・補修、住居等の掃除・整理・整頓、生活必需品の買い物、関係機関との連絡、その他の家事であり、介護報酬は、1,530円である。中間に位置づけられている複合型は2,780円である。

謝 辞

本研究をまとめるにあたりご助言を下さいました筑波大学心理学系教授小玉正博先生に謹んで謝意を表します。

文 献

- 江角弘道・呉郷美奈恵・斉藤茂子・落合のり子・小田美紀子 2002 テレケアを活用した在宅虚弱高齢者同士のネットワーク形成における保健事業の試み．平成12～13年度科学研究補助金研究報告書
- 福永秀敏・児玉知子・黒岩尚文 2000 在宅介護をするホームヘルパーのストレス．老年精神医学雑誌 Vol.11, 1365-1371.
- Jordan I. Kosberg and Richard E. Cairl 1986 The Cost of Care Index: A Care Management Tool for Screening Informal Care Providers. *The Gerontologist*, 26(3), 273-278.
- 厚生省 1996 看護婦養成所の運営に関する指導要領．看護六法
- 厚生省編 1998 厚生白書平成10年版．234, ぎょうせい
- 畑智恵美・権?珠・松井妙子・栄セツコ・岡田進一・白澤政和 2001 訪問介護職の職場環境とバーンアウトの関連．在宅ケア学会誌 Vol.4, 186-187.
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定．川島書店
- 正野逸子・岡崎美智子・鷹居樹里子・白井由里子 1999 訪問看護ステーションにおける看護婦及び介護職の協働的役割に関する検討．在宅ケア学会誌 Vol. 2, 74-85.
- 宮坂剛 2001 介護保険の理念と現状の落差を問う．図説高齢者白書 2001 年度版, 168-189.
- 溝口環, 他 1995 Cost of Care Index を用いた老年患者の介護負担度の検討．日本老年医学会誌, 32, 6.

緒方正名・當瀬美枝・山田寛子 1997 在宅ケアにおける介護負担度の検討. 川崎医療福祉学会誌Vol.7, 19-32.
竹内奈緒子・村嶋幸代・服部真理子 2000 24時間在宅ケアにおけるヘルパー単独体制と看護師・ヘルパー協働体制の比較. 在宅ケア学会誌 Vol.4, 24-30.
滝波順子・佐久間志保子・石橋智昭 2000 ホームヘルパーから寄せられた業務上の悩み. 在宅ケア学会誌 Vol. 3, 106-107.
米村敦子 1996a 高齢者とホームヘルパーの双方から見

た在宅要援護高齢者の住環境と生活支援の検討(第1報). ホームヘルパーに介助される高齢者の実態・意向調査を通してみた課題. 日本家政学会誌 Vol.47, No.11, 1109-1118.
米村敦子 1996b 高齢者とホームヘルパーの双方から見た在宅要援護高齢者の住環境と生活支援の検討(第2報). ホームヘルパーの実態・意向調査を通してみた課題. 日本家政学会誌 Vol.47, No.11, 1119-1125.